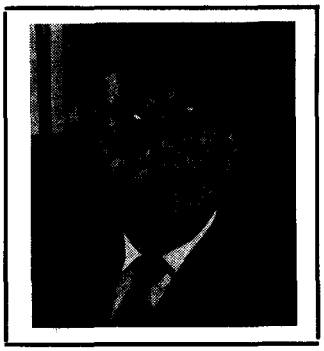
石川　馨先生を偲んで



名誉会員　**近藤　次郎**

石川　馨先生とは40年近くの長いお付きあいであるが，突然，去る4月16日に急逝された．最近は往年ほどお元気ではなさそうであったが，特にご病気のようにも伺っていなかったので，突然の悲報にただただ茫然とするばかりである．

石川先生は品質管理学の第一人者として，わが国はもとより世界的に有名である．デミング賞，米国品質管理学会グラント賞，シューハート・メダルなどを受けておられる．先生は製造現場の工程の手法としての統計的品質管理の考え方を経営全般に拡げ，アメリカから導入した品質管理を日本独特の全社的品質管理（ＴＱＣ）として確立された．この独創的な考え方は世界中に普及して，今日では経営全体の戦略として，採用されることとなった．かつて，日本製品は安いが品質が悪いという悪評があったが，これを跳ね返して，安くて品質が良い製品を作り，日本経済を今日の地位に引き上げたのはまったく先生のご功績である．

先生は1915年，東京で生まれ，東京帝国大学工学部応用化学科をご卒業後海軍の技術士官に採用され，戦時中は主として，燃料の問題に取り組まれた．終戦後，工場が破壊されて，就職するあてもない困難な時期があった．幸いにして，設備が貧弱でも大学の研究室は戦禍を免れていたので，復員した若い技術者や研究者が集まってきた．彼らは，ようやく手に入れた外国文献などによって貪るように基礎的な勉強をした．品質管理などもその１つである．石川先生は統計的な方法を用いて，データ解析をすることに興味を持たれ，石炭のような粉体のサンプリング手法についての論文を提出されて，1958年，工学博士の学位を授与された．その後，先生は品質管理の普及に努力され，日科技連の品質管理ベーシックコースのセミナーなどで講師として活躍された．そのテキスト「品質管理入門」は多くの読者を獲得し，最近，第３版がでたばかりであり，海外でも広く翻訳活用されている．

先生は生まれつき強靱な体質に恵まれており，その上，激しい情熱と信念を持っておられた．夜を徹して，講習生のレポートに添削の赤インキを入れられ，一睡もせずに翌朝教壇に立って熱弁をふるわれることはしばしばであった．その意気込みには頭の下がる思いがしたものである．

先生の教育法は象牙の塔にこもって数理統計学の研究に専心するに止まらず，製造の現場に飛び込んで自ら手をとって作業員を指導するというようなやり方であった．この先生の気迫には技師長から工員まで心から敬服したものである．さらに対象を拡げて企業の経

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．

営者にも憶せず，率直にものをいわれた．日本に品質管理がこのように普及して，それによって大きな効果があがったのも，このような先生に対する大きな信頼感が基礎になっていると思う．

石川先生は日本オペレーションズ・リサーチ学会に深い関心を寄せられ，創設以来会員として参加された．またORがあまりにも学究に偏り過ぎないように，現場から問題を拾い上げ，真に経営に役立つ型でこれを産業に返すよう常に助言をいただいていた．そこで学会としては，遅まきながらご功績を称え，フェローとして推戴することに決定した．4月28日の総会におけるフェロー記授与式には自ら出席されるといっておられたが，ついにその日を見ることはできなかった．誠に残念の窮みである．

品質管理も先生の提唱される全社的品質管理となると，経営問題に立ち入らざるを得ない．そこでORとの共通の分野が生まれる．現在では，TQCもORも経営工学の手法として，互いに緊密に連絡して発展する方向をとっている．これは先生の年来の主張に適うものである．今，先生を失ったことは本学会にとっても甚だ大きな損失であると思うが，人間はいつまでも生きることができないとすれば，先生のご遺志を継ぐ若い研究者が会員の中にも大勢おられるという事実をもって，先生のご満足がいただけるものと考える次第である．

故 石川馨先生略歴

住所　東京都調布市飛田給2丁目11番1号
大正4年（1915年）7月13日　石川一郎，冨美子の長男として東京に生れる
昭和14年3月　東京帝国大学工学部応用化学科　卒業
昭和14年4月　日産液体燃料株式会社　入社
　　5月　海軍造兵　中尉
昭和16年5月　海軍造兵　大尉
昭和22年1月　東京帝国大学　助教授
昭和33年2月　工学博士（東京大学）
昭和35年4月　東京大学工学部　教授
昭和51年4月　東京理科大学工学部　教授
　　5月　東京大学　名誉教授
昭和53年4月　武蔵工業大学　学長

〔本学会関係〕
理　　事　昭和34～35年度
評 議 員　昭和33～46年度・59～60年度
フェロー　平成元年3月
平成元年4月16日逝去　脳出血

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．